

コメディリック第2回「ただのホラー」

「齋藤とがちゃ口と大赤子」

登場人物

齋藤 野彦

がちゃ口 テオ・ポー

大赤子 シロスコフ

陰陽師\倫之助 ペイリー・チャイルド

美奈子 ミーニイ・アイリツシユ

【し・明転】

のそのそと歩く大赤子の面倒を見ながら歩く  
がちや口

がちや口 「おい、大赤子、ちゃんと歩いてくれよ  
—おいらはお前の母ちゃんじゃないんだ

ぞ—

大赤子 「だあ。だあ。だあ」

がちや口 「なんだよ—疲れたのか—？」

大赤子 「つかれただあ（疲れた）」

がちや口 「しようがねえなあ。ここで少し休む

ぞ」

大赤子 「だあ」

休憩する二人

がちや口 「休むのは少しだけだぞ。妖怪盆踊りに

間に合わなくなっちゃうからな」

大赤子 「だあ」

スマホみたいにはっぱを出すがちや口

がちや口 「お、猫娘ちゃん浴衣着てるってよ  
あ、ろくろ首も踊ってるらしいぞ。早く  
行くぞ大赤子」

手に持った哺乳瓶を飲む大赤子

がちや口 「なんだよそれ一人だけ。おいらにも飲  
ませてくれよ」

哺乳瓶を差し出す大赤子

がちや口 「（飲む）うわつまずっ！何だよこれ！

沼の味がするぞ。沼！それも汚え地域の  
沼だ！人間の偏差値が低い地域の沼の味  
だ」

大赤子 「うっへへへ」

がちや口 「何を笑ってんだよ…（人間を見つけ  
て）おい！人間だ！大赤子、隠れる！」

急いで身を隠す二人

がちや口 「…あぶね—。人間に見つかったら、ぬ  
らりひよん様に罰を受けなきゃいけねえ  
からな。お前知ってるか？ぬらりひよん  
様の罰」

大赤子 「（首を振る）」

がちや口 「まずは身体のどこかを切り落とされる。その後「魑魅魍魎」って入れ墨を彫らなきゃいけないんだ。魑魅魍魎って人間が人間って入れ墨彫ってるようなもんだろ。死にたくなるぜ」

大赤子、涎掛けをめくると「魑魅魍魎」と入れ墨は入っている

がちや口 「おめえ、入れ墨が入ってるじゃねえか！人間に見つかったんけ？」

大赤子 「あうう。あうう」  
がちや口 「なんてこった。大赤子。もう人間には見つからねえよう気をつけねえと」

大赤子 「ああ」

齋藤がスマホでティンダーしながら歩いてるところ二人の元を通りかかる

齋藤 「んだよろマツチしろよろそくそく……うわ！……え？え？」

がちや口 「おーおめえ、何やってんだ？」  
齋藤 「いや、え？」

がちや口 「おめえも盆踊りに参加するの？もう少し先にあるぞ。おいらたちは少し休憩してるだけだ」

大赤子 「だあ」

齋藤 「え、盆踊り？え？」

がちや口 「山の上だからな。遠いよな。疲れてねえか？お前も少し休んでけよ」  
齋藤 「え、あ、はあ……」

恐る恐る座る齋藤

がちや口 「初めて見る顔だな。俺はがちや口ってんだ。寝てる間に人間の歯並びを悪くするお調子者だ」

齋藤 「うわ、最悪だな」

がちや口 「こいつは大赤子。全部がでけえ赤ん坊だ」

大赤子 「あうあ。あううあ（どうも。よろしく）」

齋藤 「でかい……」

がちや口 「お前は？」

齋藤 「え？……齋藤……です」

がちや口 「齋藤？聞いたことねえな」

齋藤 「いや、結構いますけど……」

がちや口 「どこから来たんだ？」

齋藤 「いや、東京から…」

がちや口 「東京？おめえは東京の妖怪なんけ？」

齋藤 「妖怪？」

がちや口 「だったら知ってるはずなんだけどなあ？東京の妖怪にはおいら詳しいからよ

お

齋藤 「妖怪…？」

がちや口 「おい大赤子、おめえは齋藤のこと知ってたか？」

大赤子 「ううあ（いいや）」

がちや口 「そうだよなあ。聞いたことねえよな」

齋藤 「いや、あの」

がちや口 「おめえはどんな妖怪なんだ？」

齋藤 「あの、妖怪じゃないです」

がちや口 「ん？」

齋藤 「僕、妖怪じゃないです」

ケラケラ笑うがちや口と大赤子

がちや口 「なーにを言ってるんだ！お前はどつから

どう見ても妖怪じゃねえか。面白い奴だな！」

齋藤 「僕、妖怪じゃないです。人間です」

間

ケラケラ笑うがちや口と大赤子

がちや口 「なーにを言ってるんだ！お前が人間なわけないだろ！まだおいらの方が人間に見えるぞい！なあ？」

大赤子 「あうあう（ほんとほんと）」

齋藤 「いや、僕、人間です」

間

ケラケラ笑うがちや口と大赤子

がちや口 「もうこれ以上はやめてくれ！クソが：クソが漏れちまう！お前は妖怪。どこをどうみても魑魅魍魎。お前は魑魅魍魎だよ」

大赤子 「あはははは：あああああ！」

がちや口 「おい！齋藤があんまり笑わせるから大赤子がクソを漏らしちまったぞ！あーあーお前が大赤子のおつむを変えるんだぞ。齋藤」

齋藤 「いや、人間です。本当に人間なんです」

間

がちや口 「おめえ、本当に人間なんけ？」

齋藤 「人間です」

がちや口 「…嘘だあ」

齋藤 「本当です」

がちや口 「…これはたまげた。妖怪にしか見えんぞ」

齋藤 「傷つくなあ」

がちや口 「こんな魑魅魍魎顔の人間がいるもんけ」

齋藤 「そんなにですか？」

がちや口 「お前は魑魅魍魎よりも魑魅魍魎だよ」

泣き出す大赤子

〔M・地響きーCー〕

がちや口 「あー！しまった！大赤子が泣き出した！」

齋藤 「え、なに？なに？」

がちや口 「大赤子が泣くと地震が起きるんけ！いないないばあ！いないないばあ！」

泣き止まない大赤子

がちや口 「ああ…齋藤、頼む！大赤子をあやしてくれ！」

齋藤 「ええ…いないないばあ！」

〔M・地響きーCO〕

大爆笑する大赤子

がちや口 「こんなことは妖怪にしかできん」

齋藤 「だから、人間ですって！」

ぐずり出す大赤子

がちや口 「わかったから。大赤子がまた泣き出す

前におつむを変えてくれ」

齋藤 「ええ！？」

がちや口 「はよ！」

齋藤、大赤子を連れてそばを離れ、おつむを変えろ

齋藤 「うわ！くっさ！くっさ！（嗚咽）」

無邪気に笑う大赤子

がちや口 「妖怪にしか見えんけどなあ…」

戻ってくる齋藤と大赤子

齋藤 「変えてきましたよ」  
がちや口 「ありがとう」

お礼に哺乳瓶の飲み物を差し出す大赤子

齋藤 「え？」

大赤子 「あいあおお（ありがとう）」

がちや口 「お礼にくれるとな」

齋藤 「ありがとう…（飲む）うわ！まっず！  
くっさ！」

がちや口 「はっはっは！沼の味がするだろう？人  
間の偏差値が低い場所…新小岩とか鎌田  
とかの！」

齋藤 「とにかく、くっさい」

がちや口 「齋藤。人間のお前がこんな山奥に何の  
用か？」

齋藤 「いや、その、仲良しと思ってた友達が  
僕だけ誘わないでキャンプやってるから  
脅かしてやろうと思って」

がちや口 「齋藤…それは行っちゃだめだ。お前だ  
け誘われてないんだろ？」

齋藤 「…誘われてない」

がちや口 「だったらそれなりの理由があるんだか  
ら行っちゃだめだ」

齋藤 「でも」

がちや口 「でもじゃない。誘わないってことはそ  
れなりに理由があるんだよ。妖怪の世界  
でもそういうのあるから」

齋藤 「そうなんですか？」

がちや口 「あるよ。齋藤、お前も大人だろ？大人  
になってから風紀は乱すな。妖怪だって  
風紀を乱す奴は嫌われるんだから」

齋藤 「わかりました…」

がちや口 「お前、友達いねえのか？」

齋藤 「友達もいないし、彼女もいない」

がちや口 「…よし、おいらたちが友達になってや  
る！なあ？大赤子？」

大赤子 「ともだち！ともだち！（友達！友  
達！）」

齋藤 「がちや口…大赤子…」

がちや口 「女は…自分で頑張れよ！」

齋藤 「でも…全て諦めろって言われて…」

がちや口 「何を言ってるんだ！諦めたらそこで終わ  
りだ！諦めなかったら何か変わるかもし  
れない。天狗さん言ってたぞ「諦めな  
かったら鼻伸びた」って」

齋藤 「天狗ってあきらめなかったから鼻が長  
いの？」

がちや口 「そうだぞ。結果、おいらたちみたいなの

マイナー妖怪じゃなくて、超メジャー妖怪になれてんだからよお。おめえも諦めるな！恋も女も何もかもよ！」

齋藤 「がちや口：ありがとう」

がちや口 「よし、お前人間の中だったらブスカもしんねえが妖怪の中では中の下ぐらいか

もしんないから、とりあえず妖怪盆踊りに一緒に行ってみつか？」

齋藤 「うん！行く！」

がちや口 「さあ行くぞ！大赤子！」

大赤子 「いぐううう」

鈴の音が聴こえてくる

齋藤 「え？何か聞こえる」

鈴を鳴らしながら陰陽師が出てくる

陰陽師 「我は陰陽師、魍魅魍魎ども、今日こそ

根絶やしにしてくれる」

がちや口 「陰陽師！大変だ！みんなが危ない！」

陰陽師 「みんな？まずはお前たちが消えるんだよ。妖怪どもめ。三匹とも今すぐに滅ぼしてくれ」

齋藤 「いや、三匹って！僕は妖怪じゃないです！人間です！」

陰陽師 「嘘をつくな。私の目はごまかせないぞ。お前はどこからどう見ても妖怪だ。

それにお前からは妖怪のクソの匂いがする」

齋藤 「いや、それは、さつき、ああ！」

陰陽師 「まずはお前から滅ぼしてくれる：臨兵闘者皆陣裂在前（リン、ピョウ、トウ、シャ、カイ、ジン、レツ、ザイ、ゼン）」

陰陽師、齋藤（肩パン

齋藤 「いったあ！」

陰陽師 「強力な妖怪だな：喰らえ！臨兵闘者皆陣裂在前（リン、ピョウ、トウ、シャ、カイ、ジン、レツ、ザイ、ゼン）」

齋藤 「痛いっもう……」

陰陽師 「何という怨念……この世への未練……悪霊退散：悪霊退散：滅べ！臨兵闘者皆陣裂在前（リン、ピョウ、トウ、シャ、カイ、ジン、レツ、ザイ、ゼン）」

やり返す齋藤

陰陽師と齋藤による肩、パンの応酬

陰陽師、負ける

陰陽師

「うぐううう。こんなに強力な妖怪がいたとは…貴様、名は何という」

齋藤

「…齋藤だ！」

陰陽師

「齋藤…清明様へご報告せねば…齋藤、大妖怪・齋藤…」

齋藤に敗れ、去る陰陽師

がちや口

「齋藤！大丈夫かえ！？」

齋藤

「肩がめちゃくちゃ痛い…」

がちや口

「齋藤、ありがとうなあ。おめえさんのおかげで沢山の妖怪たちが救われた。ありがとう」

大赤子

「あいあおお」

齋藤

「別に俺はそんな」

がちや口

「齋藤、おめえは強いんだ。だから何も諦めなくていい」

齋藤

「…うん。やつぱり諦めない。ずっと女の事しか考えてないんだ。だから俺、必ず女を手に入れる。うん、よし。今すぐ山を下りて、人間の女を探してくる」

がちや口 「そうか。齋藤、じゃあおめえにこれ

やるよ（笛を渡す）この笛を吹いたらおいらたちがこの恩を返しに駆けつける。

頑張れ齋藤」

齋藤

「うん。ありがとう。がちや口」

大赤子

「あいおう（さいとう）」

齋藤

「大赤子もね」

がちや口

「よし、おいらたちは盆踊りに行ってくる。達者でな。齋藤！」

齋藤

「うん！さよなら！」

山奥へと去っていくがちや口と大赤子

齋藤

「行っちゃった。よし、帰るか」

いちやいちゃしながら出てくる倫之助と美奈子

倫之助

「ここなら大丈夫でしょ？」

美奈子

「えー本当にここでー？」

倫之助

「いいじゃんー」

美奈子

「もうしようがないな…ひっ！誰かいる！」

倫之助

「…齋藤じゃん！」

美奈子

「え…うわ！齋藤だ！」

倫之助

「うわ、お前、ダメじゃん、来たら」



美奈子 「こつわ！本当に怖い。あ、驚いて涙出てきた」

倫之助 「齋藤：お前、なにやってんだよ。俺たちの風紀を乱すなよ」

齋藤 「：いないいないくばあ！」

美奈子 「ひい！」

倫之助 「え、なに急に」

齋藤 「泣いてるから。いないいないくばあ！」

あ！」

美奈子 「ひい！もうやだ！この前より怖い！」

倫之助 「ちよ、戻ろう。齋藤、お互いのため

な？お互いのためだから。早く山降りろよ！」

逃げ去る倫之助と美奈子

齋藤 「（笛を吹く）」

現れるがちゃ口と大赤子

がちゃ口 「早くねえか？」

【し・暗転】

——了——